The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	非言語的な思考とコミュニケーション : AAC への応用という側面とともに
Author(s)	ディーター, ローマー
Citation	臨床哲学. 2012, 13, p. 62-90
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7339
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

非言語的な思考とコミュニケーション
― AAC への応用という側面とともに

ディーター・ローマー（フッサール文庫、ケルン大学）

私たちはたいてい、人間は言語の助けを借りて思考している、と確信している。私はここで、人間がどのように言語なしで思考することができるかについて一つの考えを提供し、さらに夢想の現象学的分析の助けを借りながら、私たちはいつもこの非言語的なシステムを使っているということを皆さんに確信させようと思う。

人間には、通常の言語的思考様式と対照的に、言語なしのきわめて基本的な思考方法がある。それは、受け入れられる結果に到達するために、私たちが繰り返し再生することでゆっくりと変様することができる、過去と未来の出来事の光景的イメージとともに働く思考方法である。そのおかげで私たちは、かつての経験を基にして未来の課題を克服することができる。私たちはたいていこの光景的ファンタスマを夢想と解釈しているが、実際にはそれらはそれよりもはるかに重要な機能をもっている。

言語なしの思考に加えて、私はまた、身振りやパントマイムや擬音語を用いた言語なしにコミュニケーションを行なう人間の能力―私が手足のコミュニケーションシステムと名付ける混合システム―をも主題とするだろう。

次に私は、認知と計画を保存し移動させるこれら二つの方法に共通の特徴を解明する。どちらのシステムも国語の難しい意味論ではなく、簡単な類似性の意味論を用いている。

最後に、コミュニケーションを行ない世界を理解するための最も基本的な方法についての洞察が、治療実践のためにも何らかの含蓄があるのはどのようにしてか、ということについていくつか指摘することを試みる。その関連を示すために、重い失語症に陥った人々のコミュニケーション能力を回復するための「拡張的および代替的コミュニケーション（AAC）」[訳注1]の方法を用いた最近のいくつかの経験について議論する。

しかし、私の主張を支える基本的な方法は、思考とコミュニケーションのためのこれらの代替的で非言語的な方法における現象学的分析である。私は夢想を、言語なしに思考するための卓越した方法であると考える。私たちは夢想において、ふつうは強い感情と混ざり合っている光景的‐ファンタスマ的な様態で、事態の表象をもっている。現象学的方法を

用いた夢想の分析によって、この光景的‐ファンタスマ的なシステム（SPS）[訳注2]は認知的表象の基本的な非言語的システムの一つであることが明らかになる。

私の目的を達成するために、思考とそのうちにあるシンボルの一般的な機能についてのきわめて大まかな概念から始めねばならない。「思考」は、認識を再活性化し、これにより未来の行動を決定するためにかつての経験を用いる能力として理解される。たいてい私たちは、人間の思考はいつも言語的な思考であると信じている。—しかし私が確信しているのは、**私たちの思考のほとんどは言語を用いていない**ということである。言語なしで思考することは可能なのであり、私たちはふつう非言語的な表象のシステムを用いているのである[1]。

このきわめて非常に大まかな思考という概念に加えて、私たちは、言語をその特殊な一例としてもつような、思考において使われるシンボルを表す概念を用いなければならない。**表象のシンボル的システム**という概念は、私たちの言語がその一例に過ぎないような能力というこの一般的な観念を意味している。それにもかかわらず、この一般的な観念は、言語の場合において最もよく説明される。表象のシステムは、事態や出来事の適切な直観をもつことなしに、それらについての観念を私たちが形成することを可能にするはずである。ふつうこの思考は言語表現という手段を用いる。しかし、言語は表象のシステムの一つにすぎず、言語がするのと同じかほとんど同じことを遂行する、表象の他のシンボル的なシステムを考えることが原理的に可能である。

私はこうしたことを、フッサールの意味の理論を検討することで、すなわち、カテゴリー的直観つまり認識のスペチエス的な志向を充実する複雑な作用についての彼の分析に基づく意味の理論を検討することで主張したい。私の見るところでは、フッサール現象学は洗練された意味の理論を提供しており、その理論は言語に基づく思考と基づかない思考とを理解するための基礎として役立つ。言い換えれば、この意味の理論は、言語とは別の手段を用いた認識内容を表す表象のシステムの可能性を開かれたままにするのである[2]。しかしこのことはまだ、人間が実際に両方の様態で思考することができるということを明らかにするものではない。

人間が言語によって思考できることは容易に理解されるが、私たち自身の意識のなかでなお機能している表象の非言語的なシステムの存在を確信するのはそれほど簡単ではないように思われる。私の見るところでは、私たちはさまざまな表象のシステムを同時に用いており、それらのシステムのうちには言語、身振り、感情、そして光景的イメージが含まれる。このことは私たちのうちで機能している非言語的システムの現象学的分析を要求する。

私たちは、夢想の光景的様態を研究することがとりわけ実り多いものであることを見ることになろう。

1．認識、思考、意味

人間の思考は概念的な言語を用いているように見える。私たちがどのように概念の助けを借りて思考するかについては、いくつかのきわめて役に立つ現象学的記述がある。この点に関して最も基本的なのは、事態の直観的明証の根拠となると考えられる作用の機能についての洞察である。フッサールは、認識の直観的根拠をカテゴリー的作用と名付けている。さらに、この直観を言語のような表象システムの要素に接続するように働く他の作用もあり、フッサールはこれを意味付与作用と呼んでいる。これはすでに一つの重要な出発点である。というのもそれは、言語はそれ自体では知識ではないし、知識が初めから言語的形式をもつわけでもないということを示唆しているからである。

まず、いくつかの洞察を表現するために、言語的表現を用いるよく知られた例から始めよう。意味付与作用と、カテゴリー的対象の明証を提供する直観的作用との複合的な相互作用において、ふつう最初に問題になるのは、直観に表現を適合させること、すなわち正しい表現を見出すことである。正しい表現だけが、或る人がどんな事態を直観しているのかを後に他者が知ることを可能にしてくれる[3]。私たちは自分の洞察を正しく表現する方法をそれほどはっきりと知っているわけではない。自分がもった直観に表現をよりよく適合させようとするとき、実に奇妙なことに、私たちは或る表現が「自分が心のなかにもっていたもの」により近いとしばしば感じるだけである。私たちはふつう私たちの共同体の日々の文脈において語や句の使用について学ぶのであり、したがって、なぜある言い回しが私たちの言おうとしていることに他のものよりもよりよく適合するのか、を正確には—すなわち規則の助けを借りては—言えないことがしばしばある[4]。

言語使用の他の方面に目を向けてみよう。私たちは他者が用いる言語を、ふつうは使われた文に結び付けられている直観を指す語や文として解釈することができる。こうすることで、語や判断が目指している事態の志向についての明確な考えを得ることができる。私たちは初めからそれを自明のこととはしていないが、これらの志向に関する直観を得るために何をせねばならないかを私たち自身の経験から知っている。しかしこのことはまた、言語と事態の直観とは分離できないわけではないという事実をも示している。言語は事態

を表象する一つのシステムなのである。このことが意味するのは、私たちは認識的志向を表す表象を―言語使用の規則に基づいて―創造することができ、この表象はその状況について私たち自身がさらに思考する際に用いられうるとともに、同じ事態についてのきわめて信頼できるコミュニケーションを他者と行うための基礎ともなりうる、ということである。しかし、共有された志向はやはり志向された事態の直観ではない。カテゴリー的直観は、言語的表象に比してより基本的かつ原本的で独立している。私たちは言語の助けを借りて、以前直観的にもったのと同じ事態を想像することができ、しかもこれは直観が不在であっても可能である。（事態とその文脈を変様するという選択肢を伴う）認識的志向の再活性化は、一般的に言えば、表象システムの基本的機能である。表象システムが―言語がそうするように―コミュニケーションを可能にするとしても、それはその基本的機能に比べれば付加的な特徴なのである。コミュニケーション機能に注意を向けることなしに、その基本的なレベル、すなわち孤独な思考者のレベルでの表象システムに取り組む価値はあるわけである。

思考は密接に言語と結び付いているという広く行き渡った意見に反対して、私が示したいのは、知識における直観（カテゴリー的直観）とそれに結合される意味付与作用（そして場合によっては意味付与作用に基づく言語使用も）との関係についてのフッサールの分析は、異なる考え方に余地を残しているということである。もしそうなら、私は非言語的な表象システムについて語ることになろう。

私たちが表現のために使える別のものとは何だろうか？それぞれの能力と特徴的な限界をもった三つの類型を挙げることにしたい。このリストが完全だというつもりはない。

1. 言語とコード化された身振り言語（ASL[訳注3]など）。

2. 物真似とパントマイムを伴うコード化されていない身振り。これは手足のコミュニケーションシステムの一種である。

これら最初の二つの様態は孤独な思考と同様にコミュニケーションにも使えるが、三番目のものは孤独な思考においてのみ使われうる。

3. 感情と結びついた過去と未来の出来事の光景的ファンタスマは、孤独な思考における表象には適しているが、公的なコミュニケーションには使えない。こうした光景的ファンタスマは夜の夢だけでなく、白昼夢〔夢想〕にも見出されうる。

非言語的な表象システムの詳細に立ち入る前に、事態の直観と、この事実について思考するために用いるであろうシンボル的表象のさまざまな様態との関係について私たちが

知っていることを要約しておきたい。

一般に、言語と思考とのつながりは私たちが信じがちであるほど密接でも堅固でもない。私たちは自分の洞察をさまざまな言語で表現できるだけでなく、母語とは別の言語で思考することもできる。私たちのほとんどは以下のような経験に馴染みがあるだろう。私たちが十分に通じている外国語が話されている外国で数日過ごした後、私たちの思考はこの外国語の形式に染まってしまっている。この例が示しているのは、言語のレベルは思考・シンボル的表象・表現という現象全体の表面にすぎないということである。認識の最も基本的なレベルは直観なのである。

認識内容についての思考と言語との緩やかなつながりに関して、私たちは次のように反事実的に自問してみよう。ひょっとすると、カテゴリー的直観はかなりの程度まで一次的で独立しているので、シンボル的な媒体がその情報を保持し、この直観的認識の仮説的な操作を可能にするということは実際には必要ないのではないか？　しかし、これは妥当ではない。実際には、私たちが事態の直観を保持できるのはほんの短い間だけである。その後は認識内容を保持するためにシンボル的媒体をもたねばならない。シンボル的媒体を用いるとき、直観は、この事態は事実であるという堅固な確信（これもまたシンボル的形式を取るのであるが）へと変形される[5]。このことは未来の事態の仮説的操作に対しても妥当する。私たちは選択肢について熟考する間にこの操作に着手するのである。こうしたことが狭義の思考を特徴づけている。

こうして、確信のシンボル的な担い手が、狭義の思考の三つの本質的な能力の前提となる。すなわち、(1) 同じ認識対象を呼びさまし心のうちに保持する能力、(2) この認識から他の認識を生み出す能力、(3) 未来の可能性を操作する能力（そしてまた、過去の歴史の経過に関するさまざまな仮説について考える能力)、この三つである。これらの中心的な能力によって、私はさまざまな状況における対象や出来事のありうる未来を操作し、ありうる帰結や障害や問題の解決について熟考することができるようになる。思考とは本質的に認識内容を能動的に扱うことなのである。

このように、思考はシンボル的表象の媒体をもたねばならない。しかし、その媒体が言語である必要はない。とはいえ、言語はそうしたシンボル的表象システムの最も重要な特徴について、次のようなヒントを与えてくれる。すなわち、私はいつもシンボルの質料的な担い手を生み出すことができねばならない、ということである。例えば、公的な発話であれ内的な発話であれ、私はいつも話し言葉か書き言葉を生み出すことができねばならな

い。シンボルの担い手がつねに用意されている場合にだけ、私は思考することができる。この担い手は直観的認識に基づく意味付与作用において、その意味を実現しなければならない。このことは、言語にも、その他すべての非言語的な表象システムにも妥当する。この点については、非言語的なシンボルの使用もフッサールの意味の理論のパターンに従うことになる。

こうして、私たちはすでに知っていることを次のように結論付けてもいいだろう。すなわち、言語は認識的意味の便利な担い手であり、私がいつでも声を上げて話すことができるから、それは思考と公共のコミュニケーションとを可能にするのだ、と。そして内的思考に関しては、内的な声を思考の担い手として機能させることができる。しかし、私たちの結論はこの平凡な洞察を超えていくこともできる。というのも、私はいまや、思考の役に立つシンボル的システムについて、少なくとも一つの一般的な特徴を知っているからである。つまり、私はいつでも—内感においてであれ外感においてであれ—シンボルの担い手を生み出すことができねばならない、という特徴を。こうして、思考を可能にするが公共のコミュニケーションを可能にするものではないような、意味の内的な担い手も生じうるのである。そしてまた、言語、身振り、パントマイムのように、思考と公的なコミュニケーションの両方を可能にするようなシンボルの担い手もあるかもしれない。しかし、これらすべての場合において言語がシンボルの担い手である必要はないことは明らかである。つねに代わりになるものがあるのである[6]。

2．思考とコミュニケーションにおける非言語的な表象システムへの現象学的接近

私たちは意味のシンボル的担い手として、どんな代わりのものをもっているのか？私たちのリストは完全なものではないが、次のように始まる。コード化された身振り言語、パントマイムや擬態語を伴うコード化されていない身振り（これはすでに言及した手足のコミュニケーションシステムである）、そして感情を伴う光景的ファンタスマ。以下で私は、後の二つのシステムに集中して取り組み、最後にいくつかの顕著な類似点を解明するつもりである。

手足のコミュニケーションシステムから始めよう。一つの簡単な例によって、身振りやパントマイムでコミュニケートする能力がたいてい過小評価されていることが示される。外国にいて、現地の言語を話すことができないが、空港に行かねばならないという場面を

想像してみよう。私はタクシーの運転手に会い、現地の言語を用いないで、彼に私の差し迫った願いを知らせる必要がある。このような状況では、私たちは即座に、身振りや擬態語という手段やパントマイムの助けを借りて自分の願いを伝えようとし始める。運転手を指さし、タイヤを回すパントマイムをし、車を運転する音を真似る。それから自分を指さして、荷物をもって走るパントマイムをし、最後に出発する飛行機の音を真似る。

この振る舞いは、私たちの非言語的な表象システムをよく明らかにするものである。すなわち、私たちは躊躇せず、それ以上に思考することもなく始めるのであり、この方法でコミュニケーションを試みることに確信をもっている。この反省されていない確信には、こうした非言語的なコミュニケーションの仕方は、私たちが言語を用いているときにもたえず生きているということを明らかにする。というのは、私たちはこうした身振り‐パントマイム‐擬態語によるコミュニケーションを「どのように」するのかについて不思議に思うことはないからである。私たちはそれがうまくはたらくかどうかまったく疑問に思うことなく、単にそれを用いている。どういうわけか私たちは、あたかもこの種のコミュニケーションを暗黙のうちにたえず行っていたかのように振舞っているのである。

この種のコミュニケーションは、異なる文化の人々とも、発展の程度の高低に関わらずうまくはたらくのであり、容易に訂正され洗練される。というのも、私たちは共通の行為という文脈のうちにあり、このことが進行中の相互的な訂正を可能にするからである。非言語的なコミュニケーション能力への私たちの信頼を理解するために、民俗学者が未知の言語を話す部族に出会うという状況について考えることもできる。私たちは手足のコミュニケーションに基づいて、飲食や睡眠のさなかで共同の実践を―相互的な修正を伴いながら―始めるのである。

コミュニケーションを始める際のこのような慣習化されていない形式は、つねに例外的で一時的である。というのも、コード化されたコミュニケーションシステムがふつうは共同の実践のなかですぐに確立されるだろうから。身振りかあるいは双方の言語の要素が用いられ、相互に受け入れられて、これにより双方をつなぐ新たな慣習が確立される。これは普遍的な人類学の一部である。すなわち、あらゆるものごとについての規則はそれぞれの共同体のなかでのコミュニケーションを通じて自ずから確立されるのである。こうして、慣習化されていないコミュニケーションを「始める」形式はすぐに終わりを迎える。私たちは後にこの主題に後で戻ってくることにしよう。

以上は、非言語的な表象システムが公共のコミュニケーションに用いられた一つの例に

すぎなかった。いまや私は、内的思考の非言語的な様態に戻ることにしたい。内的思考は孤独な思考者にのみ役立ち、いかなるコミュニケーションがなくとも展開可能である。

夢想する際、私たちは願いや恐れの表現として光景的ファンタスマを用いており、それは認識内容の表象として機能している、と思われる。私たちが願ったり恐れたりするのはつねに或る一つの事態である。しかし、私たちはこれらの手段によって自分の好みや緊急の願いや事態についての見解を単に表現するだけではない。夢想は、この問題への或る種の応答であり、心的な行為、問題含みの状況に対する心的な操作でもあり、それは今まで考えられていなかった解決へと導いてくれるかもしれないということが判明するだろう。**私が主張したいのは、夢想は私たちの意識のうちでなおはたらいている古い思考の様態だ、ということである。**

夢想において、私たちは或る問題へのありうる解決策を展開しようとしている。すなわち、私たちは選択肢を、その解決策としての有用性を、そしてそれぞれの帰結を心のうちで試す。たとえ私たちがこの事実をどんなにまれにしか反省しないとしても、この光景的ファンタスマの生は、私たちの意識の生の大きく重要な部分を構成している。誰にでもよく知られているいくつかの例がある。例えば、夜、私たちを不眠にする緊急の課題や不確かなことについての心配である。また、うまくいくという想像もたくさんある。さらに、ほとんどの成人男性が数分ごとに性について考えており、この思考様態はまったく概念的ではないということを示唆するような経験的‐心理学的調査にも言及しておきたい。これらの意識の生の光景的なエピソードにおいて、言語的表現は画像的要素の都合がよいように背景に退いている[7]。—言語の助けを借りて願いや問題について思考することもできるということや、夢想においては〔言語的システムと非言語的システムの〕両方がしばしば合併しているということを、私は否定しているのではないが、私が強調したいことは、私たちは非言語的な表象システムをも使っているということである。

次のように自問してみよう。夢想についてのこうした研究はなお現象学であるのだろうか？私たちは現象学的研究の中心から余りにも遠く離れているように見えるかもしれない。しかし、フッサールの前述定的経験の理論を一瞥すれば、これは明らかになる。というのも、それが前述定的と名付けられる理由の一つは、私たちがそれを言語なしでももつことができるからなのである。

3．非言語的な表象システムの一部としての感情

非言語的な表象システムのもう一つの重要な要素は、例えば光景的ファンタスマの枠組みのなかで機能しているような感情である。私の見るところでは、情緒を独立した表象システムと解することはできない。というのも、私たちがそのうちで感情の対象となる事物や（ありうる）出来事を心に抱くような、別種の表象がつねに前提されなければならないからである。情緒は表象システムへの最も重要な要求に容易に応えることができる。というのは、私たちは実際の状況において情緒をもちうるし、また直観的状況が不在の場合も、つまり想像によってのみでも、情緒を（恣意的にではないが）「生み出す」ことができるからである。例えば、憤怒の感情は、或る状況では私を暴力的に動かすかも知れないが、同じ感情は、後になって同じ状況について単に考えるときにも再び現れることがありうる。どちらの場合でも、その感情は私にその出来事の価値について何かを「伝え」ており、それは特定の意味をもつ私の内的な「表現」の一部である。或る素敵な経験について考えるとき、楽しみの感情はその出来事の望ましい質を「意味している」のである[8]。

夢想は、私たちの日常の切望、願い、恐れを独自の方法で一貫して表象する。このようにして夢想は、決して起きるべきでない出来事とどんな犠牲を払っても起きるべき出来事という二極の間の、重要さの個人的な序列を反映している。そしてまた、夢想は洗練された精神分析的な解釈学を要求しない。夢想は夜の夢とはきわめて異なるのである。というのも、夢想は対象の同一性や因果性、および時間的序列を尊重するからである。またこの観点から見ると、夢想は過去・現在・未来の現実における深刻な問題に向けられた「理性的な」思考活動としても受け取ることができる。

ありうる出来事における関連性の序列という枠組みはまた、緊急の必要や任務、圧迫する恐れが変化せずに同じままである限り、なぜ特別な夢想がたえず経験されねばならないのか、ということをよりよく理解させてくれる。しかし、夢想はすべてを不変のまま反復するのではない。私たちはこれらの反復における小さな変様に注意せねばならない。それは現実の行為における現実的な選択肢を表しているからである。

一つの例を挙げよう。もし私が一人の尊大で攻撃的な男に強く迫られ、状況や環境のために彼の要求に屈したとすれば、この苛立たしい状況は私の夢想に何度も荒々しく現れるだろう。しかし、この反復される夢想は同一のものではない。冷静な反省的自己観察によって、私は自分の行動の小さな変化に気付き、とてもゆっくりとではあるが、何度も繰り返

し再生するなかで、彼の攻撃的な要求を追い払うための正しい解決策へと導かれることになる。「これが正しい反応だっただろうに。もしこうしていたら、彼を止められたのに！」にもかかわらず、この洞察は後悔の感情を伴う非現実的なものであり、それは過去を変えられないが、それでも、それは未来の現実に関する或る種の行為なのである。つまり、この洞察によって、仮に再び起きた場合には、類似した状況において適切に行為し、不当な要求に対抗できるようになる[9]。同じことは、私が心配しながら予期している出来事にも当てはまる。

したがって、夢想の光景的‐ファンタスマ的な様態によって、夢想を思考の古い様態として解釈することが可能になる。私が夢想の様態で心配すると、事物や人物は画像的な表象として現れ、言語は背景へと退く。私の心配している内容は光景的ファンタスマにおいて表象されるが、そのつど小さな変様を伴っている。そしてこれらの小さな変様のなかで、私たちはときおり問題へのうまい解決策に気付くことになる。例えば、宝くじに当たることは差し迫った財政的問題をたやすく解決するだろうが、それはあまり起こりそうにないし、私に自信を与えてくれない。一生懸命に働くことや、しばらく何らかの欠乏に苦しむことも同様にはたらくだろうが、こうした考えの方が、成功についてのより強い自信の感情を私に与えてくれる。これは明らかに非言語的な思考様態としての夢想の機能を示しており、それが、いわば日常の問題の解決へと導いてくれるのである。加えてこのことは、夢想は問題に対処する子供じみた方法への回避的退行と同一視されてはならない、ということにも目を向けさせる[10]。

体系的な観点から見れば、私たちが思考できなければならない主題群はきわめて限定されている。そのリストには次のものが含まれる。（1）対象、その現在と未来の状態、その使用（例えば道具としての使用）、また同様に私の個人的な評価における価値と、共同体の観点からみた価値、すなわち文化的な価値。（2）現在、過去、未来における出来事、それらについて感じられた価値とそのありうる帰結。（3）感覚、感情、確信をもつ他者と、私や集団の他の成員に関係する彼らの実践的志向。―私が他者の志向という最後の主題群に集中することができるように、最初の二つの主題の例を探すのはあなたがたにお任せしたい。

或る人の性格や私に対するそのありうる振る舞いの光景的イメージを想像することは、とりわけ行為に巻き込まれた他の人たちとの複雑な布置のなかでは、難しいように思われる。しかし、光景的ファンタスマはこの見かけ上の困難に一つの単純な解決を提供してく

れる。さきほどの野蛮なクラスメイトを思い出すなら、私には彼の顔が邪悪な目付きで私をにらみ、拳を握りしめて私にパンチを食らわせようと構えているのが見える。しかし、この「イメージ」は単なる彼のイメージではない。それは私が居合わせている特徴的な光景であり、私はそこで彼のパンチによる痛みに身もだえし、彼のさらなる攻撃を恐れており、その背景には私を助けてくれない友人の集団がいるという光景である。この光景は、彼の性格と、或る社会的文脈のなかでの彼の未来の行動との両方についての中心的なアスペクトを提示している。

或る人の態度と行動の光景的提示は、いま言及した場合ほど一次元的なものである必要はない。というのも通常、私たちが提示できる、他の人たちの性格の複数の面が存在するからである。こうして次のような問いが生じる。いかにして私は光景的様態において多数の（変化する）態度を考えることができるのだろうか？ほとんどの場合は一緒にうまく働いているが、ときおり鼻もちならない高慢な雰囲気を見せる同僚のことを考えよう。どちらの「顔」も、すなわち彼の性格のどちらのアスペクトも、或る光景的ファンタスマにおいて次々と、あるいは変化しながら混ざって現れるかも知れないが、それはあなたが計画を立てるための不確かな基礎をもたらす。こうして、可能性と不確実性という様相的な性格が、変化し〔互いに〕溶け込んで行く、あなたの同僚のいくつかの顔において現前している。私たちはこの変わりゆくイメージを、論理的な「または」〔選言〕の非言語的な形式として解釈できるだろう。彼の他者への態度と変化する状況における彼の選択は、他者に向けられた、わずかな時間ながら多くを物語る横顔などに表されるかもしれない。

対象の価値と有用性は変わりうるので、その変化は特徴的な光景にも反映されるかもしれない。例えば、もし私が、しょっちゅう故障し、けん引されて修理されねばならなくなるような車を所有しているならば、私がそこで自分の車についてわくわくしている特徴的光景は変様され、否定的な光景に変えられるだろう。この悪い経験の情緒的なアスペクトは、とりわけこの対象を特徴づける光景に反映されている。つまり、私はもはや、安定して使えるという楽しい期待とともに車を想像することはなく、未来の損害や出費や不便といった陰鬱な予想とともに想像することになる。こうした仕方で、特徴的光景、すなわち人物や事物や出来事を特徴づけることは、類似した表象によって展開されるのである[11]。

私たちの分析によって、人間の思考にとっての言語の重要性は明らかに限定された。言語は思考の唯一可能な手段などではまったくなく、さらに人間の意識において作動している唯一の表象システムでもない。認識の本当に基本的な能力と、現実についての私たちの

理解とは、私たちの心のうちでなお作動している、もっと単純な非言語的表象システムに基づいている。公的な言語とそれが用いる概念は、思考の能力全体のうち、きわめて表面的な層でしかないことが判明したのである。

４．非言語的な表象システムにおける類似性の意味論について

思考の光景的ファンタスマの様態に関する私の主張に、さらにいくつかのコメントを加えることを許していただきたい。

ここまでの発表のなかで、私は人間における非言語的な思考という考えを確立することに専念してきた。しかし、非言語的な手足のコミュニケーションを思い出してほしい。それはコード化されていない身振り、物真似、パントマイム、擬態語、さらにその他、手影絵のような方法を用いる。すべての人間がこれらの非言語的な表象システムを用いることができるということを示唆したい。こうして私たちは次のように問えるだろう。人間がこれら二つの表象システムの使い方を学ぶ特別な方法はあるのか、あるいは、これらの能力は何らかの仕方で「生得的」なのだろうか？

一歩下がって、これら〔「光景的ファンタスマ的な表象システム」と「手足のコミュニケーションにおける表象システム」という〕二つの表象システムに共通する構造を見つけることを試みよう。私たちは、考えを表象する両方の方法が一つの重要な要素を共有していることに気付く。つまり、両方とも類似性の意味論を用いているのである。すなわち、これら二つの非言語的な表象システムのすべての表象手段、すべてのシンボルは、表象された対象に何らかの仕方で「類似している」のである。

このことは明らかに意味論のきわめて独特な特徴づけであり、それは自然言語の意味論とこの意味論とを分かつ一つの重要な差異を導入するものである。この点を明らかにするために、普通の言語の意味論のごくごく基礎に立ち返ることにしたい。

国語の通常の意味論では、その言語を理解し話すことができるようになるためには、言語記号とその意味とのつながりを学ぶのに長い時間がかかる。普通の言語の通常の意味論を学ぶことは近接の関係に基づいている。ヒュームが述べるように、近接とはいくつかの同等な出来事について設立される関係であり、そこでは一つの対象が、密接な時間的かつ／または空間的な関係において、もう一つの対象とともに生じる。この過程はまた、社会集団やそのうちの一人の規範的活動によって強化されるだろう。これらの規範的活動はふ

つうきわめて単純である。例えばこれらの活動は、大人の用いるコミュニケーションを学び、順応したいという子どもの強い願いに対応している。子どもが言語の使用を学ぶ際、牛を見る機会が数回あって、そのときに両親がこの対象を「モーモー」と呼ぶ、ということがあるかもしれない。子どもが牛を間違って「ワンワン」と呼ぶのを両親が訂正することもあるだろう。このように通常の意味論は、慣習に同意し、表現と確実につなげられた意味をもつ規範的な仕方で行為する共同体とつねに関係している。この慣習と近接性の意味論は、同意と慣習に基づいており、つねに或る程度人為的である。それが隣接する諸国語と異なるのは、地域的な環境のためであり、それが私たちのアイデンティティの一部だからでもある。すなわち、それが私の特定の共同体への所属の明確なしるしであるだけでなく、それが〔例えば〕合衆国と他の共同体との差異を示すからでもある。私たちは、特定の言語を理解できるようになる前にすべての意味論の規則を学ばなければならないし、語と対象を結ぶ具体的なつながりを孤独のうちで発見できる者は誰一人としていないだろう。

それとは対照的に、非言語的な表象システムの類似性の意味論は、意志を伝達する共同体によって受け入れられた同意にも規則にも基づいていない[12]。この点に関して、類似性の意味論は、より〔人為的ではなく〕「自然な」ものである。それは記号と記号が指す対象との類似性に基づいているからである。

手足のコミュニケーションシステムに目を向けてみよう。私が走って箱を運ぶ真似をすると、それは実際の事象に類似しているように見える。飛行機の音と動きを真似ると、それは実際の飛行機の音と見かけに似ている。これが手足のコミュニケーションの訓練を受ける必要がない理由である。それは自然な類似性の意味論に基づくのであって、人為的な慣習と近接性の意味論に基づくのではないのである[13]。

さて、ここで思考における光景的ファンタスマのシステムを考察しよう。孤独な思考（夢想）における光景的ファンタスマの表象システムもまた、自然な類似性の意味論を用いている、と言うことができる。すでに見てきたように、この種の思考は言語的要素をまったくもたないか、あるいは少ししかもたないのであり、それは意味されていることを直接に〔媒介なしに〕把握する。私の夢想は私が考えている出来事に似ているのである。

5．非言語的な思考とコミュニケーションという考えの一つの応用

哲学の理論は、それ自身の権利においてはふつうきわめて興味深い—しかし、それの経

験的世界に対する関係についてはどうだろうか？私の見解では、理論は現実とのつながりをもつべきであり、私たちがそれまで理解していなかった何かを理解する助けになったり、あるいはその背景を説明したり、少なくとも経験的に私たちが吟味できる—あるいは問題解決に使える—ような結果をもつべきであろう。こうして、実践的な応用も、現象学の理論的説明を裏付けるだろう。しかし、人間は言語なしで思考しコミュニケートすることができるという私たちの理論について、そのような応用が存在するのだろうか？小論の冒頭で示唆したように、私はあると考えている。

毎年脳卒中で苦しみながらも生き延びている多くの人々のことを考えてみよう。脳卒中はたいてい、脳の広範な、あるいは小さな部分に損傷を引き起こす。脳の損傷はふつう一つの領域だけに限定されないので、脳卒中は感性・認知・さまざまな種類の記憶・運動における多様な能力の障害を引き起こす。私たちがさらに知っているのは、かなり高い割合の脳卒中患者（30-40%）が、脳卒中後に一時的あるいは恒常的な言語喪失（**失語症**と呼ばれる）に陥るということである。これらの人々の多くは、一時的かつ／または集中的な発話能力のトレーニングの後に、自発的に話す能力を回復することがある。しかし、一部の患者には長く続く深刻な言語障害（**慢性的失語症**）が残り、彼らにあっては言語トレーニングがうまくいかない。彼らの多くは自立した生活を送ることができず、他者に依存したままになる。

いま、この集団の一部で、言語能力のためにはたらく脳の領域（ブローカ野とウェルニッケ野）だけに損傷が起こり、感性・記憶・認知・運動能力はきわめてよく保存された患者たちの集団について考えてみよう。この重度の失語症をもつ患者の下位集団に関して、私の主張との関係でたくさんの質問が生じる。（1）言語なしのテストで試験し測定したと前提して、彼らの知能は昔のレベルに到達するだろうか？　（2）彼らは「言語なしで思考する」ことができるようになり、そのことが、新しい経験をして日常の問題解決にその経験を組み込めるようにしてくれるのだろうか？　（3）彼らがもし言語抜きのコミュニケーション方法を用いることができるなら、彼らは自立してコミュニケートすることができるようになり、社会的能力を回復できるようになるのだろうか？　（4）手足のコミュニケーションと、およそ画像的または光景的な仕方で現実を考えるためのあらゆる手段に対して私が主張した「類似性の意味論」を用いる手順と手助けの方法はうまくいくのだろうか？

いま、これらすべての質問に答えることを私に期待しないでいただきたい。私はただ、

私たちの意識のはたらき方について内省的な探求をしているにすぎない。しかし今回は、私の質問に関して、経験的な研究からさしたる助けを得られると期待することもできないだろう。例えば最初の質問に関して言えば、脳卒中患者の集団における知能喪失についてはほんの少ししか調査はなされていないのである。

残りの三つの質問については、いくらか情報を与えることができる。これは発話障害一般の治療における興味深い進展のおかげである。たぶん、「拡張的および代替的コミュニケーション」（AAC）についてすでに聞いたことのある方もおられるだろう。それは、さまざまな理由から言語的なコミュニケーションに困難をもつあらゆる種類の障碍者を手助けするのに活躍しているが、外傷的な脳の負傷や脳卒中の後に発話ができなくなった人をも手助けしている。

AAC に役立っている道具のうち強力な線は、私たちにはいまや、類似性の意味論を拡張的に用いるものとして理解できるような方法の周りに集中している。すなわち、(1) パントマイムを用いる身振り的なコミュニケーション（小論では手足のコミュニケーションと呼んだ)、そして（2）対象の絵とその対象に関わる行為の絵に基づいたコミュニケーションで、これには印刷された媒体によるもの（低レベルの AAC）か、手で持てるコンピュータか手のひらサイズのコンピュータ上での画像に基づくコミュニケーションシステム(高レベルの AAC で、例えば、Sandt-Koederman 2005 を参照)とがある。このコンピュータ装置は、対象・出来事・願い・事物の特性などの画像的な説明を提供する「タッチスピーク」[訳注4]というプログラムを用いてコミュニケーションを高めるためのものである（絵文字がさまざまなレベルで組織されており、ときには個人的にデザインすることも可能である)。それぞれのシンボル（絵文字）に触れると、装置がそれに対応する表現を読み上げる。このように、この装置の使用は類似性の意味論に基づいており、指示された意味は機械によって話し言葉あるいは書き言葉に翻訳される。すなわち、他者とコミュニケートするために国語の近接性と慣習の意味論を使って翻訳されるのである。この装置を使って、多くの患者がコミュニケーション能力を回復し、拡大している。

しかし AAC という手段には動機の面での困難もある。つまり、これを用いると、言語の使用を強要するための治療的な努力を断念してしまうように見えるのである。重度の失語症をもつ若い患者たちの下位集団では、この装置は年配の患者において受け入れられたほどには受け入れられなかったことが判明している。

一方、裕福な国々では AAC は本当の「ムーブメント」になってきている。脳卒中の後

で重度の持続的な失語症をもった患者の集団に対してなされた一つの研究にのみ言及しておきたい（Sandt-Koederman 2007a, 2007b）。成功はつねに漸進的だが、結果はきわめて励みになるものだった。というのも、全体で 26 人の患者集団のうち、半数以上の患者においてコミュニケーション能力を再び上がったからである。7 人の患者（23%）は、このシステムの拡張的で独立した利用者として分類された。5 人の患者（17%）は、独立した利用者として分類される程度にまでコミュニケーション能力を回復した。さらに別の 5 人の患者（17%）は、パートナーと一緒のときにだけこの装置を使用し、彼らの補助を必要とした。さらに別の 13 人は、この装置の機能的使用では成果が得られなかった。

さて、私の見るところでは、なぜ脳卒中後の重度の発話喪失に苦しむ人々が AAC という方策から多くの利益を得られたのか、その理由を私たちは理解できる。それは、類似性の意味論に基づく思考とコミュニケーションのシステムが活性化されたからなのである。

終わりに

おそらく私たちはこれら二つの非言語的表象システムの統語論的な側面にも目を向けるべきだろう。この課題にとっては、最初に出したタクシードライバーの例は単純すぎるかもしれない。私たちは少なくとも、手足のコミュニケーションが、過去と未来の物語、行為する者と行為を受ける者の物語を語ることができるよう期待するべきである。私たちはこれらを手足のシステムにおいても示すことができる。言語の出現以前の昔における二人の狩猟者のコミュニケーションを―古典的な類型だが―考えてみよう。この状況で、私は太陽を指さし、狩りが午前中に成功することをもう一人に示すだろう。私は現時点の太陽から太陽が朝に昇ってくるところまで指している手を戻すことによって時間を示唆することができる。また私は、手を一種の指人形として使い、私が見た野ウサギを示唆することもできる。さらに私は、ウサギを見たことと、それを弓で射るのに見事成功したことをもパントマイムで表すこともできる、等々。

これら少しのパントマイム、擬態語、物真似、指人形は、今朝や昨日に何が起きたか、あるいは明日何が起きるかをきわめて正確に他者に知らせるだろう。この表象システムの統語論の機能は、私たちに以下のようなことを知らせることである。すなわち、行為している人物は誰か、彼はどの対象に働きかけているか、どの行為から誰が被害を受けるのか、いつその行為は起きたか、あるいはいつ起きるのか、といったことを。これらすべての質

問は、類似性の意味論に基づく非言語的な手足のコミュニケーションによって答えられる（そして同じことが孤独な思考のファンタスマ的システムにも妥当する）。類似性の意味論に媒介されていれば、誰がどんな出来事に関わって行為しているのかを私は理解できる。さらに、時間という次元に関わる限り、ファンタスマ的光景の内的な順序を指示しうる物語的構造を私たちは見出す[14]。このように統語論の課題も遂行される。そして、これらすべての能力はきわめて単純な類似性の意味論に基づいているのである。

私たちはいつでも手足のコミュニケーションによってコミュニケーションを始めることができる。というのも、それは人為的な近接性の意味論に基づかないからである。しかし—すでに言及したように—それは始まったばかりのコミュニケーションシステムという一時的な状態に留まってはいないだろう。そうでなければ〔そうした状態に留まっているなら〕、なぜそれが、広範囲に渡って永続する、きわめて基本的だが普遍的なコミュニケーションシステムとして確立されなかったのかを理解するのは難しい。このことの理由は何だろうか？　その理由は単に、コミュニケーションの共同体がつねに規範と価値の領域に住んでいるという事実、すなわち、それらの共同体はコミュニケーションを含むあらゆる種類の活動の規則を確立するように努めるという事実である。したがって、もしコミュニケーションが手足のコミュニケーションという様態で（あるいは別の様態で）確立されれば、それのために慣習と規則が確立され、伝統によって強化され保存されるだろう。このことは以下のことを意味する。つまり、その手足のコミュニケーションはその共同体のなかでのみ理解されるような地域の身振り言語へと変形し、慣習的なサインが類似性の意味論において生まれたものを反映する要素と混合されるのである。これが今日の身振り言語の状態である。このように、手足のコミュニケーションという「原‐言語」は、それが使われるときにはすぐさま、人為的な意味論の規則を部分的に伴う通常のコード化された言語へと変わってしまう。これは類似性の意味論に基づく手足を用いた「原‐言語」の避けられない宿命である。

しかしいま、私たちはもう一つの難問を解かねばならない。類似性の意味論をもった「原‐言語」がつねに公的なコミュニケーションのなかで上書きされ、通常のしかし人為的な意味論をもった表象システムへと徐々に変わるとすれば、—いったいそれはどのようにして人間のうちで生き延びることができるのか？答えはまたしてもきわめて単純である。つまり、光景的ファンタスマの様態における非言語的思考のきわめて基本的な形式が同種の意味論を用いているからである。そしていま、私たちは思弁的な方向に進んで、以下のよ

うに主張することになろう。光景的ファンタスマという非言語的システムが（私たちが使うことのできる多くのさまざまな人為的な意味論をものともせず）生き延びるのだから、この事実だけでも、非言語的表象システムは間違いなくあらゆる種類の言語システムよりもずっと基本的であることを証明しているのである。

文献

- Fager (2006), Susan / Hux, Karen / Beuckelman, David R. / Karantounis, Renee: "Augmentative and Alternative Communication Use and Acceptance by Adults with Traumatic Brain Injury". In *Augmentative and Alternative Communication*, March 2006, Vor 22(1), 37-47
- Husserl, Edmund (2001): *Logical Investigations*. Vol. I and II. Routledge, London
- Husserl, Edmund (1969): *Formal and transcendental Logic*. Martinus Nijhoff, The Hague
- Jacobs (2004), B. / Rew, R. / Ogletree, B.T. / Pierce, K.: "Augmentative and Alternative Communication (AAC) for adults with severe aphasia: where we stand and how we can go further". In: *Disability and Rehabilitation* vol. 26, No. 21/22, 2004, 1231-1240
- Lasker (2008), Joanne, P. / Garrett, Kathryn L.: "Aphasia and AAC. Enhancing Communication Across Heath Care Settings". In: *The ASHA Leader*, 2008, June 17 (adapted from Garrett, K.L. & Lasker, J.P. (2007): "AAC and severe Aphasia: Enhancing communication across the Continuum of Recovery". In: *Perspectives on Neurophysiology and Neurogenic Speech and Language Disorders*, 2007, 17, 6-15)
- Lohmar, Dieter (2002): "Husserl's Concept of Categorical Intuition". In: *Hundred Years of Phenomenology*. Ed. D. Zahavi F. Stjernfelt, Dordrecht 2002, 125-145
- Lohmar, Dieter (2008a): *Phänomenologie der schwachen Phantasie*. Kluwer, Dordrecht
- Lohmar, Dieter (2008b): "Denken ohne Sprache?" In: *Meaning and Language: Phenomenological Perspectives*. Ed. F. Mattens, Kluwer, Dordrecht, 169-194
- Lohmar, Dieter (2008c): "How do primates think? Phenomenological Analyses of a non-language system of representation in higher Primates and Humans". In: *Husserl and the non-human animal*. Ed. by Chr. Lotz and Corinne Painter. Dordrecht 2008, 57-74
- Lohmar, Dieter (2010): "The function of Weak Phantasy in Perception and Thinking". In: *Handbook of phenomenology and Cognitive Science*. S. Gallagher / D. Schmicking (eds.), Heidelberg New York, 159-177

・ Sandt-Koederman (2005), van de W. Mieke E. / Wiegers, Jiska / Hardy, Philippa: “A computerised communication aid for people with aphasia”. In: *Disability and Rehabilitation*, 2005, 27(9), 529-533 [TouchSpeak, first study]
・ Sandt-Koederman (2007a), van de W. Mieke E. / Wiegers, Jiska / Wielaerd, Sandra M. / Duivenvoorden Hugo J. / Ribbers, Gerard M.: “A computerised communication aid for people with aphasia. An exploratory Study”. In: *Disability and Rehabilitation*, November 2007, 29 (22), 1701-1709
・ Sandt-Koederman (2007b), van de W. Mieke E. / Wiegers, Jiska / Wielaerd, Sandra M. / Duivenvoorden Hugo J. / Ribbers, Gerard M.: “High-tech AAC and severe aphasia: Candidacy for TouchSpeak (TS)”. In: *Aphasiology,* 21 (5), 2007, 459-474
・ Symons, Donald (1993): “The stuff that dreams aren’t made of: Why the wake-state and dream-state sonsory experiences differ”. In: *Cognition* 47 (1993), 181-217

（訳：川崎唯史・浜渦辰二）

注

1　私は別の機会に、現象学的な意味の理論は思考の別の形式を許容すること、人間における非言語的な表象システムの必然性を証明する方法があること（Lohmar 2008b）、加えて私たちは、霊長類のような高度に脳が発達した動物と、いくつかの重要な思考法を共有していること（Lohmar 2008c）を主張したことがある。ここでこれらの主張について議論することはできないが、それらは私の理論のより広い文脈に属している。

2　私の英文を改善する努力をしてくれた Saulius Genusias に感謝する。

3　フッサールの意味の理論については、『論理学研究』の第一研究と第六研究を参照。カテゴリー的直観の理論については、『論理学研究』第六研究の第六章、および Lohmar 2002 を参照。

4　私は適切な表現の「正しさ」という主題に立ち戻るだろう。意味－記号の関係は（指標－指示されたものの関係と同様に）連合に基づいているので、意味は表現に用いられた記号と連合され、そのつながりは直観的に感じられる（Hua XIX/1, 36; Husserl 2001, § 4）。言語表現を事態の直観に適合させる過程の方位づけは、言語表現が私たちの意味しているものと正確に合わない場合、その表現を訂正するなかで容易に把握される。

5　いずれも言語的形式をもつ必要がないことを思い出されたい。感情と結びついた画像的シンボルも同

様に機能する。

6　別の場所で私は、非言語的な表象システムが人間のうちに、そして高等な霊長類のうちにも必然的にあるのでなければならない、という考えを支持する論拠について議論したことがある。その論拠は、霊長類の驚くべき心的能力をよりよく理解するようにデザインされた人間の進化と二重過程の理論に遡るものである。このことは、人間と霊長類が低いレベルで共通の思考様式を共有しているという仮説を支持している。こうして私たちは、霊長類が文化をもつにせよ洗練された技術はもたない一方で、なぜ人間は高度に発達した文化、科学、技術、そしてコンピュータをもっているのかを明らかにする必要を感じる（Lohmar 2010, Ch.2）。

7　このことは夜の夢にもあてはまる（Symons 1993）。

8　感情によって部分的に表現されうるもう一つのアスペクト、つまり時間の次元があることを心に留めておくべきである。ある出来事を恐れることはその未来の性格を指示し、後悔は過去を指示する。

9　未来のこうした能動的な操作の結果は、与えられた状況下でのこのような問題の解決の理想的な画像である。にもかかわらず、転換（リフレーミング）の操作がうまくいった結果はしばしば後になってから、上司の不当な批判や道路上での対立などに立ち向かうことに私が失敗したことをかばうために、本当の話として伝達される。

10　私たちはまた、光景的ファンタスマのシステムにおける非言語的な思考様式は言語的な思考様式ほど素早くも効率的でもないということを強調するだろう。それは、問題を解決する方法を見つけるためにいつも何度か反復するのであり、或る出来事の光景的な表象が圧縮された速さでなされているとしてもそうなのである。

11　対象や出来事に対する私の情緒的な価値づけに加えて、私の計画された未来の行動についての他者による価値づけを伴う光景的ファンタスマをもつこともできる。私が未来の行動について問題のある計画を考えているとき、突然親しい友人や関係者が特徴的な光景のうちに現われ、どことなく悲しげに、しかし同情して私を見る。これによって共同体の観点からの私の計画された行動の価値づけがはっきりさせられる。このことは、私に同情している人でさえ真剣に考慮しているのだということを意味する。彼らの同情や心配の表現は同時に、私の計画に対する他者の価値づけやありうる反応についての重要な手がかりを与えてくれるのである。

12　類似性の関係はとても簡単であるように見える。私たちは例えば父と子の間や木と羊の間などに、類似性を単に「知覚する」ことができると信じがちである。現象学者として私たちはまた、この能力が、木のような或る特定のタイプの事物に共通のしるしについての直観を成立させる基本的な力（本質直観）であることも確信している。しかしこのことは、類似性そのものを認識する能力が最も幼い子ど

もにおいてすでに確立していることを示すわけではない。これはまた、発達心理学での研究の主題でもあるだろうが、ここで私はそれを提供できない。この点に関する私の意見は以下のものである。私たちは経験によって類似性を認識し、能動的に用いる能力を確立することができる。すなわち、私たちは異なる事物のうちに類似の要素を認識する何らかの基本的な能力をもっているがゆえに、類似性の関係について学ぶことができる。しかし、この能力を使うことを他者から学ぶ必要はない。

13　この状況では私たちの生活世界の基本的な類似性もまた前提されていること、例えば空港やタクシーや運転手などが存在することに私は同意する。しかし私はこのことが問題であるとは思わない。

14　さらに隔たった出来事に関しては、情緒による時間の指示を真剣に考慮しなければならない。例えば、もし私が深く後悔しながら或る出来事について考えているとすると、この情緒は明らかに或る価値を示している。しかしそれはまた、この出来事が過去に起きたということをも示しているのである。〔他にも、〕ファンタスマ的な喜び、前もっての喜び、そして不安は未来を指示し、恥や過去の激怒は過去を指示している、等々〔も考えられる〕。

訳注

訳注 1　AAC(Augmentative and Alternative Communication) については、わが国では、まだ余り知られていないと思われるので、以下に、ウィキペディア英語版による説明の一部を紹介しておく。

「AAC とは、話し言葉や書き言葉を表出したり理解したりする機能の障碍をもつ人びとのために、話す事や書くことを補完したり代替したりするのに使われるコミュニケーションの方法を表す包括的名称である。AAC は、脳性麻痺、知的障碍、自閉症といった先天的機能障碍、筋萎縮性側索硬化症（ALS)、パーキンソン病といった後天的障碍を含め、広範囲の発話・言語機能障碍をもった人びとに使われている。AAC は、或る人のコミュニケ―ションに永続的に加えられるものにも、一時的な補助にもなりうる。

現代における AAC の使用は、外科手術後に話す能力を失った人びとのためのシステムとして、1950 年代から始まった。1960 年代から 1970 年代の間に、障碍をもった人を健常者の社会に包摂し、自立のために必要となるスキルを発達させる方向に西洋で取り組み始めたことがきっかけとなって、手によるサイン言語（手話）や画像シンボルによるコミュニケーションの利用が著しく成長していった。AAC が独自の権利をもったフィールドとして出現し始めたのは、1980 年代に入る前のことだった。マイクロコンピュータや発話合成を含め、テクノロジーの急速な進歩が、発話出力装置によるコミュニケ―ションや、身体的な障碍をもった人びとにとってのコミュニケーション

にアクセスするための多様な選択肢に道を開いた。

AAC のシステムは多様である。補助なしのコミュニケーションは装置を使わず、サインや身体言語を含んでいるのに対して、補助ありのアプローチは外部道具を使い、絵やコミュニケーション・ボードから発話生成装置にまで及んでいる。AAC で使われるシンボルは、ジェスチャー、写真、絵、スケッチ、文字、単語を含み、単独で用いられることも組み合わせて用いられることもある。身体の部分、ポインター、適合されたマウス、アイトラッキングが、ターゲットになるシンボルを直接に選択するために使われることもあり、アクセス・スキャニングによる切り替えが間接的な選択のためにしばしば使われている。メッセージの生成は、一般に、発話によるコミュニケーションに較べてはるかに遅く、その結果、成功率を高めるための技術が、要求される選択の数を減らすために使われることもある。こうした技術は、ユーザーが合成する単語や語句をしばしば推測するという「先取り」や、長いメッセージがあらかじめ設定されたコードを使うことで呼び出されるという「エンコーディング」を含んでいる。」（2012 年 2 月 29 日アクセス）

なお、本文中の〔　〕内は、読みやすくするために訳者が補足した説明である。

訳注２　「光景的‐ファンタスマ的なシステム scenic-phantasmatic System」に言うところの「ファンタスマ phantasma」とは、ギリシア語で、「現れ phantasia」や「現象 phainesthai」などとも関連する語であるが、邦訳のプラトン全集では、「現れ、見かけ、影像、幻影、幻像」などと訳され、アリストテレス全集（特に『霊魂論』）では、「表象像」（←「表象 phantasia」）と訳されている。ここでの「ファンタスマ」の理解に役立つような、アリストテレス『霊魂論』の叙述をいくつか紹介しておく。「感覚されるものが立ち去っても、感覚器官のうちには感覚が表象 phantasia が残存している」(425b26)。「表象は感覚や思考とも別のものである。そしてそれは感覚なしには生じない、またこの表象なしには思想は生じない。しかし表象と思想とが同一でないということは明らかである」(427b13)。「感覚は可能態か現実態かである。……しかしこれらのどちらも存しなくとも、何か表象像 phantasma が現れる、たとえば睡眠中の表象像のように」(428a4)。「表象像なしには霊魂は決して思惟しない」(431a6)。「思惟能力は表象像のうちで形相を思惟する」(431b2)。「真理を観る時には、同時に表象像をも観なければならない」(432a5)。これらの叙述のなかには、非言語的な思考においてファンタスマ（表象像）が果たしている役割が語られているように思われる。

訳注３　"American Sign Language"（アメリカ手話）の略記で、アメリカやカナダで使われている手話である。「イギリスとは音声言語においてはほぼ同じ英語でありながら、アメリカ手話（ASL）はイギリス手話（BSL）とは全く違っている。その理由は、アメリカ手話はフランス手話から枝別れしてきた手話だからである。しかし、現在、アメリカ手話とフランス手話はアルファベットをのぞき、ほと

んど表現が異なっている。」（ウィキペディアより、2012 年 2 月 29 日アクセス）

訳注 4　「Touchspeak：自立的な生活のための拡張的および代替的コミュニケーション補助器具」というウェブサイトには、次のように紹介され、下図のような画像が付けられている。「タッチスピーク（TouchSpeak）とは、もともと PCAD プロジェクト―マイクロソクフト・ウィンドウズによる AAC (Augmentative and Alternative Communication) を産み出すための米欧コンソーシアム―の 12 年にわたる連続的発展と洗練の成果である。利用者は、自分の存続している能力を維持し、それなりの自立性を保持し、カメラや電話機のようなすべてが組み込まれた装置を使うことを専用装置から始められるようになっている。もともとは主に失語症のような後天的障碍をもった成人のために作られたが、失行症や運動神経疾患のような他の患者グループでの使用にも成功してきた。」（2012 年 2 月 29 日アクセス）

［解題］

本稿は、2011 年 3 月 21 日、大阪大学待兼山会館にて予定されていた講演会の発表原稿を訳したものである。東日本大震災、津波、福島原発事故と続く 3 月 11 日の 10 日後に予定されていたが、3 月 14 日の深夜に「このような状況で日本に行けないことを理解して欲しい……君と君の国の人々はいまはもっと急を要する気がかりなことを抱えていると思う」という、来日を断念した旨のメールが届き、講演は日程未定の延期となった。その後、震災･津波の被害･救出の状況や原発汚染と避難の推移を見守り、やがて復興が徐々に始まるのをにらみながら、延期日程の交渉を続けてきたが、それぞれの事情もあり日程調整がうまく行かず、当面来日は未定となってしまった。そこでローマー教授に、講演会は実施できなかったが、その時に配布するために用意していた邦訳原稿だけでも、講演を期待していた日本の研究者たちに最新の研究として公表してはどうか、と打診したところ、こころよく承諾をいただいた。ここに掲載するに至ったゆえんである。

思えば、ローマー教授との出会いは、私が DAAD（ドイツ学術交流会）の奨学生として留学し、ケルン大学で学び始めた 1984 年 9 月に遡る。ケルン大学を選んだ理由は、一つに、かつてフッサールの助手を務めたルートヴィッヒ・ラントグレーベのいたケルン大学に、その弟子達のケルン学派が形成されていたこと、もう一つに、その弟子の 1 人で『フッサール空間構成の理論』（1964 年）の著者 U・クレスゲス教授が教鞭を取っていたこと、そして最後に、ケルン大学にはフッサール文庫（ベルギー･ルーヴァン大学にあるフッサール文庫の言わば支部が、ケルン大学とフライブルク大学にある）があること、であった。ただし、クレスゲス教授は、上記の博士論文執筆の後、ドイツ観念論に関心を移し、私が行った頃はカントの講義とともに、分析哲学（ラッセル、ストローソンなど）の演習を開講していたため、折角彼のもとで「空間と身体」の現象学を学ぶつもりで行った私は落胆させられた。しかし、彼がケルン大学のフッサール文庫に連れて行ってくれて、自由に資料や机などを使わせてやってくれと同文庫の助手に紹介してくれたことには感謝しなければならない。そこで引き合わされた助手が、若きローマー氏であった。

当時フッサール文庫の所長を務めていたのは、エリザベート・シュトレーカー教授で、彼女の講義や演習にも参加はしたが、個人的には余り馴染めずに、ケルン大学での研究はもっぱらフッサール文庫での読書が中心になった。しかし、そんななかで半年経った頃、新しい道を開く手助けをしてくれたのは、助手のローマー氏であった。ケルンからアウトー

バーンで1時間くらいのところにあるヴッパータール大学で、上記ケルン学派のラントグレーベのもう1人の弟子で『生き生きとした現在』（1966年）の著者クラウス・ヘルト教授が教鞭を取っていた。彼のもとに集まる研究者たち（ヒュニー教授、アグィーレ教授らが常連だった）によって当時隔週で行なわれていた「現象学コロキウム」に、ローマー氏も参加していて、車で行っているので席に余裕があるから一緒に行かないかと誘ってくれて、通うようになった。

ヘルト教授の人柄もあって、その「現象学コロキウム」は大変刺激的な集まりであった。私はDAADに留学の延長願いを出し、二年目はヴッパータールに移ることになった。私がヴッパータールに移ってからも、「現象学コロキウム」にやってくるローマー氏とは、毎回会うことになった。こうしてヘルト教授との交流も始まったわけであるが、そこへの道を開いてくれたのは、当時のローマー氏であった。留学から帰国後も、ドイツに学会などで行く機会があったり、ローマー氏を日本に招聘する機会があったりと、これまでにたびたびお会いする機会があった。昨年も、そのような繋がりで、京都で行なわれる科研「間文化現象学」（代表：谷徹）のシンポジウムに参加するついでにということで、大阪にも足を伸ばして講演をしてくださる予定であった。しかも、私がいま所属する講座が「臨床哲学」なので、それに関連するようなテーマでとお願いしたところ、ここに掲載したような講演内容を選んでくださった。このことが、是非とも講演原稿をこの『臨床哲学』に掲載したいと考えたもう一つの理由　である。

ここで取り上げられている「非言語的な思考」という問題は、かつて拙著『フッサール間主観性の現象学』でもいくつかの観点から触れた問題でもあった。当時の私は、「言語は思想を表現する道具なのだから、言葉によって表現される前にすでに思想はあったはずであり、それゆえ、まず前言語的な思考の過程があり、ついでそれが言語によって表現にもたらされる」という、私たちが陥りやすい言語観に対して、「表現をもつ前に思想をもっていたとしたら、表現以前にあった思想は何によって成り立っていたのか」というウィトゲンシュタインの辛辣な問いを手がかりに考えていた（拙著、p.76f.）。そこからむしろ、フッサールが、「人間の思考は、通常、言語的に行なわれ、理性のすべての活動は、まったくと言って良いほど、語ることと結びついている」（XVII, 23）とか、「孤独に言表しつつ思考する時、われわれは、まず思考形成をもち、ついで適当な語を探す、というわけではないのは確かだ。思想は、初めから言語的なものとして遂行される」(XVII, 359) と書き付けているのを晩年の著作『形式的論理学と超越論的論理学』のなかに見つけて、「死

せる語音に生と意味を付与する前言語的思考」という言語観はフッサールのものではないと論じた。そこでは、もっぱら「前言語的思考」ということを問題にして、表現にもたらす言語の働きと、表現以前にもすでに思考とともに働いている言語の働きがあることを指摘することに主眼点があったため、「非言語的思考」を否定するかのような書き方をしていた。

また、ローマー教授は、フッサールの「前述定的 vorprädikativ」という用語を、ほとんど「非言語的」と同じ意味として理解しているように見えるが、それについて拙著では、「名指す Nennen」と「陳述する Aussagen」という言語の二つの機能から捉えようとした。それは、『経験と判断』では、「それについて陳述がなされるところの基礎となるもの hypokeimenon」（名指し言葉 onoma）と「それについて陳述されること kategoroumenon」（述べ言葉 rehma）との二分節性として語られていることである。したがって、「前述定的」というのは、この述べ言葉に先立って名指し言葉が働く場面を表示しているのであって、「前言語的」という趣旨ではない、と主張した（拙著、p.80ff.）。それは、『論理学研究』のフッサールの言い方では、「言語的 verbal 認識の性格を十分備えながら、その言葉が感性的記号的内容についてはまったく顕在化されていないような、言葉なき wortlos 認識」(LU II/2, 66) ということになろうとも述べた。そこでも、「非言語的思考」への道は示唆されるのみに終わっていた。しかし、それを踏まえたうえで、私が拙著で示したのは、フッサールの「地平志向性」の発見であり、そこで初めて、経験が言語によっては汲み尽くしえないというフッサールの根底にある揺るぎない経験主義のありかを探し当てた。それこそ非言語的に働いている経験を、ローマー氏が「非言語的思考」によって考察しようとするものとは異なるパースペクティヴから解明しようとするものであっただろう。しかし、それは私がその後辿ることはなかった道であった。

今回、ローマー教授の紹介により、「拡張的および代替的コミュニケーション（AAC）」というムーブメントを知り、「タッチスピーク」というプログラムを知った。その紹介を見て、私は、2007 年 11 月に参加した視察研修「北欧の福祉サービスと日常を感じる視察研修旅行」で、ストックホルムのスウェーデン福祉研究所に併設されたスマートラボの見学で見てきたものを思い出した。そこには、通常日本でも見られるような歩行器具や福祉器具のみならず、日本では見たこともないような、家庭内で使うさまざまな補助器具が展示されていた。もともと知的障碍者のために作られた器具が、認知症高齢者にも使えるように作り直されているとのことだが、いずれを取っても、細かい気配りがされた器具で

あった。いま思い出したのは、それらの器具で、多くの場合に、言葉ではなく、写真や絵文字やシンボルが使われていたことである。それは確かに、「非言語的思考」という考えを、障害者や高齢者のケアの場面に応用する試みのなかから生まれてきたものと見なすことができよう。いま、28 年前に出会ったものの、それぞれ異なる道を歩んできたローマー氏と、28 年ぶりに再会したような思いがしている。

改めて、ローマー教授の経歴を紹介しておこう。1974 年 - 1982 年、ケルン大学、ボン大学、ヴッパタール大学で哲学と数学を学ぶ。1982 年、ケルン大学で高等教育 (Sekundarstufe II) のための数学と哲学の分野における最初の国家試験合格。1986 年、ケルン大学哲学部で博士号取得。1986 年 -1988 年、マンハイム大学オットー・ゼルツ研究所で自由共同研究員。1987 年、ヴッパタール大学で哲学の非常勤講師。1987 年 -1990 年、ボン大学の哲学研究室での学術共同研究員。1991 年 -1993 年、ルーヴァンのフッサール文庫での滞在研究のためのアレクサンダー・フォン・フンボルト財団のフェオドール・リネン特別研究員。同時に、ベルギーのルーヴァン・カトリック大学の若手研究員。1993 年から、ケルン大学フッサール文庫での学術上級理事。1996 年 7 月、ヴッパタール大学で哲学分野の教授資格を取得。2001 年 7 月、ケルン大学で教授資格を再取得。2005 年 3 月、ケルン大学の員外教授に任命され、現在に至る。主な近著として次のようなものがある。

［単著］

- *Phänomenologie der Mathematik. Elemente einer phänomenologischen Aufklärung der mathematischen Erkenntnis nach Husserl*. Phaenomenologica 114, Kluwer, Dordrecht, 1989.（『数学の現象学 フッサールによる数学的認識の現象学的解明の諸要素』）
- *Erfahrung und kategoriales Denken. Hume, Kant und Husserl über vorprädikative Erfahrung und prädikative Erkenntnis*. Phaenomenologica 147, Kluwer Dordrecht/Boston/London, 1998.（『経験とカテゴリー的思考 前述語的経験と述語的認識をめぐるヒューム、カント、フッサール』）
- *Edmund Husserls ‚Formale und Transzendentale Logik'. In der Reihe ‚Werkinterpretationen'*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt, Darmstadt, 2000.（『エトムント・フッサールの『形式的論理学と超越論的論理学』作品解釈シリーズ』）
- *Phänomenologie der schwachen Phantasie. Phänomenologische, psychologische und neurologische Aspekte der Funktion schwacher Phantasma in Wahrnehmung und Erkenntnis*. Springer, Dordrecht/Heidelberg, 2008.（『弱い想像の現象学　知覚と認識における弱いファンタスマの機能の現象学的・心

理学的・神経学的アスペクト』）

［編著］

- *Bewußtsein und Zeitlichkeit. Ein Problemschnitt durch die Philosophie der Neuzeit*. Hrsg. von H. Busche / G. Heffernan / D. Lohmar. Königshausen und Neumann, Würzburg, 1990.（『意識と時間性 近代哲学を貫く問題の切り口』）
- *Philosophische Grundlagen der Interkulturalität. Studien zur interkulturellen Philosophie*. Bd. 1. Hrsg. v. R. A. Mall / D. Lohmar, Rodopi, Amsterdam/Atlanta, 1993.（『間文化性の哲学的基礎　間文化的哲学の研究』）
- *Philosophie aus interkultureller Sicht - Philosophy from an Intercultural Perspective*. Hrsg. von N. Schneider / D. Lohmar u.a., Rodopi, Amsterdam, 1997.（『間文化的パースペクティヴからの哲学』）
- *Einheit und Vielfalt. Die Begegnung der Kulturen*. Hrsg. von N. Schneider / R.A. Mall / D. Lohmar. Rodopi, Amsterdam, 1998.（『一と多　文化の遭遇』）
- *E. Husserl: Die Bernauer Manuskripte zum Zeitbewußtsein (1917/18)*. Hrsg. R. Bernet / D. Lohmar. Kluwer, Dordrecht, 2001.（フッサール『時間意識についてのベルナウ草稿』）
- *E. Husserl: Phänomenologische Psychologie (SS 1925). Studienausgabe*, Meiner, Hamburg, 2003.（フッサール『現象学的心理学』学生用廉価版）
- *E. Husserl: Späte Manuskripte zum inneren Zeitbewußtsein. Materialienausgabe der C-Manuskripte, Springer*, Dordrecht, 2005.（フッサール『内的時間意識についての後期草稿 C 草稿資料版』）
- *Interdisziplinäre Perspektiven der Phänomenologie*. Hrsg. D. Lohmar / D. Fonfara., Springer, Dordrecht / Heidelberg, 2006.（『現象学の学際的パースペクティヴ』）
- D. Lohmar / I. Yamaguchi: *On Time. New Contributions to the Husserlian Problems of Timeconstitution*. Springer, Heidelberg, 2010.（『時間について フッサールの時間構成の問題への新たな貢献』）
- D. Lohmar / J. Brudzinska: *Founding Phenomenology. Phenomenological Theory of Subjectivity and the Psychoanalytical Experience*. Springer, Heidelberg, 2012.（『現象学の基礎づけ 主観性の現象学的理論と精神分析的経験』）

［最近の論文］

- “Husserls Psychologie. Investigating Subjectivity”, In: *Classical and New Perspectives*. Eds. Karel Novotny, Inga Römer, Gerd-Jan Van Der Heiden, Brill, Amsterdam, 2011.（「フッサールの心理学 主観性の研究」）

- “Ego and Arch-Ego in Husserlian Phenomenology”, In: *Life, Subjectivity & Art. Essays in Honor of Rudolf Bernet*. Springer, Heidelberg, 2012, 277-302.（「フッサール現象学における自我と原自我」）
- “Genetic Phenomenology”. In: *Handbook of Phenomenology,* Ed. by S. Luft and S. Overgaard, Basil Blackwell, London, 2011, 266-275.（「発生的現象学」）
- “Psychoanalysis and the logic of thinking without language. How can we conceive of neurotic shifting, denying, inversion etc. as rational actions of the mind?” In: *Founding Psychoanalysis. Phenomenological Theory of Subjectivity and the Psychoanalytical Experience*. Ed. by D. Lohmar and J. Brudzinska, Springer, Heidelberg, 2012, 149-167.（「精神分析と言語なしの思考の論理 どのように神経の変化、否定、反転などを心の理性的作用として考えられるか」）
- “Non-Language Thinking in Mathematics”. In: *Axiomathes*, 2012.（「数学における非言語的思考」）

（浜渦辰二）